

[報告]

死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理過程

西村 美穂, 大森 美津子, 政岡 敦子

香川大学医学部看護学科

Psychological processes experienced by patients with malignant tumors who overcome feelings of illness immediately before death

Miho Nishimura, Mitsuko Oomori, Atsuko masaoka

School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University

要旨

本研究の目的は、死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理過程を明らかにすることである。方法は、診療・看護記録から患者の属性等を収集した。また、入院期間中に看護記録に記載されていた患者の感情や行動を抽出した。患者にかかわった看護師間の会話もデータとし質的帰納的に分析した。倫理的配慮は、診療科長、看護師長等に研究の承諾を得た後、患者のキーパーソンに同意を得た。

患者は男性2名であった。A氏は、50歳後半で菌状息肉症、B氏は、60歳前半で肺癌であった。入院日から死までの期間は、A氏38日、B氏44日であった。死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理は、わだかまりが融ける前に、「思い描く理想の死への道を進みたい」、「この瞬間を自分らしく生きたい」、「復活への希望」、「今までの自分では生きられない恐怖」がほぼ同時に存在していた。そして、「今までの自分では生きられない恐怖」が回避できなくなった時、「自己の歪みを認める」、「素直な感情を表出する」、「愛し愛されていることを感じる」ことができ、「わだかまりが融ける」、「命あるかぎり自分の人生を生きる」という心理をたどっていた。

今までの自分では生きられない恐怖が回避できなくなった時、自己の歪みを認める、素直な感情を表出する、愛し愛されていることを感じるといった患者の心理に変化が生じている。“恐怖”はネガティブな感情として取り扱われることがあるが、否定的なものに立ち向かう傾向をもつ。そのため、自己の歪みと向きあうことができたと考えられる。そして、歪みを認められたことで、素直な感情を表出したり、愛していることや愛されていることを感じられるようになり、わだかまりが融けたと考えられる。

死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者は、「今までの自分では生きられない恐怖」が要となり、わだかまりが融ける体験ができていた。

キーワード：わだかまり、悪性腫瘍患者、心理過程

Summary

This study examined the psychological processes experienced by patients with malignant tumors who had overcome feelings of illness immediately before death. The feelings and behaviors of patients during the most recent hospitalization based on nursing records were extracted. Data including conversations among nurses in charge of the patients were also analyzed qualitatively and inductively. Prior to conducting the study, consent from people important to the patients and the approval of the head of the department and head

連絡先：〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1 香川大学医学部看護学科 西村 美穂

Reprint requests to: Miho Nishimura, School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University, 1750-1 Ikenobe, Miki-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0793, Japan

nurse were obtained with due consideration to research ethics.

The subjects were two male patients: Patient A in his late 50s with mycosis fungoides and Patient B in his early 60 with pulmonary cancer. The hospitalization period for Patients A and B was 38 and 44 days, respectively. When the two patients overcame feelings of illness immediately before their deaths, they both had the following feelings simultaneously: “Wishing to walk on the path to my preferred way to die”, “Wishing to live true to themselves in each moment”, “Longing for resurrection”, and “Feeling scared of being unable to continue to be themselves”. When the two patients were no longer able to escape from that sense of fear, they gradually developed the following feelings: “Recognizing that my thoughts have been distorted”, “Being able to express my feelings now”, “Being able to love people and feel their love”, and “Having overcome feelings of illness”. After they had overcome feelings of illness, they become determined to “living their lives true to themselves”.

When the two patients were no longer able to escape from the fear that they could not continue to be themselves”, which is considered to be an emotion to cope with difficulties, their feelings started to change, and it helped them overcome feelings of illness prior to dying.

Keywords: Feelings of illness, Patients with malignant tumors, Psychological processes

はじめに

臨床において、死が身近に迫ってきた患者が、人生の中で解決できずに残してきた事に対して奮闘している姿に触れることがある。未解決な事は、自分自身の生き方に向けられることがある。大津¹⁾は、自分のやりたいことをやらなかったこと等が死ぬ前の後悔となることを明らかにしている。また、プロニー・ウェア²⁾は、自分に正直な人生を生きれば良かった等が死ぬ前の後悔となることを明らかにしている。自分自身の生き方以外の未解決な事としては、対人関係がある。チャプレンである沼野³⁾は、「私たちは誰しも人間関係で傷つき、いまだ癒されぬ心の傷を抱えて生きています。そして、その傷ついた心が癒されぬまま、命に関わる病気を患うという不幸に見舞われることがあります。そんなとき、私たちの心の中では多くの葛藤が生じます。」と述べている。死が直前に迫った患者は、何とか人生の最期で解決できずに残してきた事に向かい、癒されたいという切なる願いを持っていると感じる。私たち看護者には、死が身近に迫った患者の心理を十分に理解した上で、患者が自分らしく人生を全うできるようにかかわることが求められる。

死が身近に迫った患者の心理に関する先行研究では、若林ら⁴⁾は、1ヶ月以内に死が迫っている臨死患者の語った言葉を分析している。看護師が聞いた臨死患者のことばの内容の中に、「家族関係への後悔」があり、患者は、看護師を介して家族関係の修復を望んでいることが明らかになっている。川崎ら⁵⁾は、終末期患者を観察し、患者のスピリチュアルペインを

分析している。患者が語ったスピリチュアルペインの中に「自分の人生のふり返り」があり、対人関係における人生の後悔・反省を語り、死ぬ前に許されたいと望んでいることが明らかになっている。安藤⁶⁾は、がん患者に回想法を行い、ターミナル期がん患者の語りの中に、家族関係のしこりに不満があるといった家族への憂いがあったことを明らかにしている。これらの先行研究からも、死が身近に迫った時、人生の中で未解決となっていることが浮上してきている。そして、患者は後悔や反省の中で、自己と向き合うことをしている。このような状況の中で、患者が解決できていないことに向き合うという在り様を明らかにすることは、患者が人生を生きるための支援を行う上で、重要な意味をもつと考える。

筆者は、看護師として勤務していた時に、死を直前にして、人生の中で未解決となっていたことに向かい、心が満たされ穏やかな最期を迎えた悪性腫瘍患者にかかわった経験がある。入院時、患者は怒りの感情をもっており、その根底に未解決な事があることを示していた。そして病状が進行するにつれて、強い絶望といった恐怖を体験し、その後に未解決となっていたことに向かいあえていた。このことから、患者が未解決なことに向かうまでには、心理の変化があり、患者の感情が重要な意味をもっているのではないかと考えた。

悪性腫瘍患者の心理の変化に関する先行研究では、田中⁷⁾は、再発もしくは再発後のがん患者は、生きられる時間を意識し、生きる気力が持てない程の気持ちの落ち込みを経験するが、患者自身の方略を使い、希望を見いだしていることを明らかにしている。下舞

ら⁸⁾は、5年生存率が低いがん腫の患者の心理的变化は、がん告知による衝撃から始まり、治療開始により治療効果に期待し、回復への希望を抱きつつ、病状の悪化という身体要因によって身体機能を喪失することの失望、治療に対する期待や明日への希望をつなぎつつも、死が間近に迫っていることを自覚し、悟り、諦めで最期を迎えたことを明らかにしている。小山ら⁹⁾は、がん末期患者の心の移り変わりは病状の進行に関係し、予後を受け入れているか否かに関わらず、病状進行に伴う不安が常に存在していたことを明らかにしている。これらの研究から、悪性腫瘍患者の心理は、感情を伴い変化していくことや、心の移り変わりには不安が存在していることが明らかになっている。しかし、様々な感情をもちながら、未解決なことにどのように向き合うのかといった視点から研究されているものは見当たらなかった。

そこで、死の直前に未解決となっていたことに向かい、心の中でつかえている不満・不信などの感情が融けた悪性腫瘍患者の心理過程を振り返り、まとめることにした。

目的

本研究の目的は、死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理過程を明らかにすることである。

方法

1. 研究デザイン

本研究は、死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理過程を、主に診療記録や看護記録をデータとし、Shaverの感情の系統図¹⁰⁾を参考に捉えようとしており、質的帰納的研究とする。

2. 用語の定義

わだかまり

人生の中で未解決となっていることがあるため、今でも心の中でつかえている不満・不信などの不快な感情

3. 研究協力者

研究協力者は、筆者が看護師としてかかわった患者の中で、死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者A氏、B氏の2名である。

研究協力者としてA氏、B氏を選定した理由は、A氏、B氏ともに対人関係で未解決となっていることが

あり、不快な感情を持っていた。しかし、A氏、B氏ともに対人関係で未解決となっていることが解決に向かい、感謝・嬉しさ・愛という感情に満たされて、不快な感情が消えていったため、わだかまりが融けたと判断した。このような変化は誰にでも起こるというわけではなく、死を直前にして、患者が大切なことをつかんでいけたからではないかと感じ、印象的だったため研究協力者に選定した。

研究協力者と筆者との関係は、当時、筆者は看護師としてA氏、B氏の看護を行っていた。筆者は、A氏、B氏のプライマリーナースではなかったが、A氏、B氏の言動から人生の中で未解決となっていることがあると感じ、勤務の時にはA氏、B氏の部屋に訪室し、A氏、B氏や家族と話をしていた。また、プライマリーナースともA氏、B氏や家族について情報交換をしていた。このことから、事例に深く関与したスタッフであった。

4. データ収集期間

平成20年10月から平成20年12月

5. データ収集方法

データ収集は、A大学医学部附属病院で行った。診療記録や看護記録からA氏、B氏の属性や治療経過を収集した。また、看護記録から、最後の入院日から死までのA氏、B氏の情動、気分、意欲等の感情や行動を収集した。看護記録だけでは状況が十分に伝わらないところは、A氏、B氏にかかわった看護師間の会話もデータとした。

6. 分析方法

看護記録から、最後の入院日から死までのA氏、B氏の情動、気分、意欲等の感情や行動を抽出した。次に、抽出したデータの意味内容を損なわないように常に状況と照らし合わせ、A氏、B氏の言動の要約をした。そして、A氏、B氏の言動の要約で類似したものをまとめサブテーマとし、サブテーマからテーマを導き、死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理として命名した。そして、最後の入院日から死までに、どのようにテーマが現れるかを時系列で示し、心理過程を導いた。

カテゴリー化、テーマの命名においては、Shaverの感情の系統図¹⁰⁾を参考にした。その理由は、本研究の目的を明らかにするためには、根底にある死にゆく悪性腫瘍患者の心理を理解することが重要であり、先行研究^{7~9, 11~13)}では、悪性腫瘍患者は様々

な感情を呈することが明らかになっている。また、Elisabeth Kübler-Ross¹⁴⁾は、死にゆく患者の心理過程は、否認と隔離、怒り、取引、抑うつ、受容であることを明らかにしている。以上のことから、感情は死にゆく患者の心理に重要なものであると考え、Shaverの感情の系統図¹⁰⁾を参考にすることが適切だと考えた。

7. 真実性の確保

データを抽出する際、A氏、B氏の感情や行動は省略せず、看護記録に記載されているまま使用した。また、分析は、がん看護および質的研究に精通している研究者のスーパーバイズを受け、繰り返し修正を行った。また、質的研究を行っている研究者からの意見も参考にした。

8. 倫理的配慮

A氏、B氏が入院していた診療科の科長、主治医、看護師長に研究の趣旨を口頭で説明し、研究の承諾を得た。その後、研究協力者であるA氏、B氏は死亡しているため、A氏、B氏のキーパーソンに研究の趣旨、研究参加と拒否の自由、匿名性の厳守、プライバシーの保護、途中中断の自由、学会発表や論文投稿を行うことについて電話で説明し、口頭で同意を得た。後日、電話で説明した内容を記した書類を郵送し、書面で同意を得た。同意撤回書も同封した。A氏が死亡してから2年3ヶ月、B氏が死亡してから7ヶ月経過しており、患者のキーパーソンの心理状態を電話時に確認しながら、同意を得た。

結果

1. 研究協力者の概要 (表1)

研究協力者は、A氏、B氏であった。

A氏は、50歳後半の男性であった。病名は菌状息肉症であり、肺転移を認めていた。病名告知を受けており、医師からは、今回入院したら帰れないと説明されていた。今回の入院目的は、菌状息肉症の悪化に対する放射線治療、全身浮腫の軽減、肺転移による呼吸困難感の緩和であった。A氏は、これまでの人生において人間関係で周囲とぶつかり、心を許せる人は叔父だけだと話していた。性格が細かく難しかったため、妻と別居していた。入院中は妻が付き添っていたが、きつい言葉が聞かれた。妻との関係において未解決なことがあった。キーパーソンは妻であった。

B氏は、60歳前半の男性であった。病名は肺癌であった。医師からは、病名告知を受けており、約10ヶ月前に余命はあと数か月と説明されていた。今回の入院目的は、イレッサを内服していたが、第1腰椎、肝臓、腎臓への転移病巣が悪化し、胸部から背部への疼痛、下肢の麻痺が生じたため、放射線治療を行うことであった。B氏は、入院時から、娘のために治療を受けていると話していた。娘を頼っており、死後のことも託していた。一方で、医師に対して、自分が死んでも息子には言わなくて良いと怒り口調で念を押していた。息子との関係において未解決なことがあった。キーパーソンは娘であった。

2. 研究協力者の病気・病状の経過と看護師の援助のあり様

研究協力者の言動は“ ”で示す。

1) A氏の病気・病状の経過と看護師の援助のあり様
 病気・病状の程度や進行については、菌状息肉症による潰瘍形成の進行により、放射線治療は中止となった。呼吸困難感、疼痛に対しては、緩和ケアが行われた。具体的には、入院初日から放射線治療を開始するが、菌状息肉症による潰瘍形成を助長するリスクが高

表1 研究協力者の概要

研究協力者	A氏	B氏
年齢	50歳後半	60歳前半
性別	男性	男性
病名と告知	菌状息肉症で病名告知済・医師から、今回入院したら帰れないと説明されている	肺癌で病名告知済・医師から、約10ヶ月前に余命はあと数か月と説明されている
入院目的	菌状息肉症の悪化に対し放射線治療、全身浮腫の軽減、肺転移による呼吸困難感の緩和	第1腰椎、肝臓、腎臓への転移病巣悪化、胸背部への疼痛、下肢の麻痺に対する放射線治療
人生で未解決となっていたこと	性格が細かく難しかったため、妻と別居していた。入院中は妻が付き添っていたが、きつい言葉が聞かれた。妻との関係において未解決なことがあった。	医師に、自分が死んでも息子には言わなくて良いと怒り口調で念を押していた。息子との関係において未解決なことがあった。
キーパーソン	妻	娘

まり入院25日目で中止となった。潰瘍は日々進行し、ほぼ毎日創傷処置を行った。呼吸困難感の増強に対しては、酸素投与、プレドニン投与、オキシコンチン投与を行った。疼痛に対しては、オキシコンチンでコントロールした。徐々に呼吸状態が悪化し、入院38日目に亡くなった。

病気・病状の程度や進行に対するA氏の受け止めについては、入院時は死を受け入れつつも、治療効果への期待がみられた。一人で動けなくなり、不安や絶望を抱くが、しだいに等身大の自分で生きれば良いというように受け止め方に変化があった。具体的には、入院初日、“もう家には帰れない。荷物の整理はしてきた”、“治療が効いてくれたらいいな”という発言があった。入院6日目、動作時の呼吸困難感が増強すると、“一人では不安。思うように自分では動けない”という発言があった。入院8日目、呼吸困難感に対してプレドニンが開始となった。自力で動き転倒し、“もう終わり。動けなくなってしまう。重病人やな”という発言があった。入院12日目、呼吸困難感持続に対して、オキシコンチンが開始となった。“今まで意地を張っていた。これが今の状態だと分かった。無理なことをしてもいかん。急いでもできない。楽なようにできたらいい”と発言があった。入院19日目、踵部の疼痛が増強する。“妻がいたらどうにかなると思っていたが、そうはいかなくなってきた”と発言があった。入院29日目、皮膚欠損の進行、臍露出がある。“何日あるか分からないが平常心を保ちたい。覚悟はできている”と発言があった。

看護師の援助のあり様については、常にA氏や妻に寄り添い、感情を表出できるようにかかわった。また、A氏を尊重したADLや処置の援助を行った。さらに、人生の振り返りを共に行った。

2) B氏の病気・病状の経過と看護師の援助のあり様
 病気・病状の程度や進行については、放射線治療、化学療法を施行したが、徐々に状態が悪化した。疼痛に対しては、緩和ケアが行われた。具体的には、入院初日から放射線治療を1週間行い、入院12日目に化学療法を行った。入院前から疼痛コントロールでオキシコンチンを使用していたが、疼痛増強のため、入院15日目から塩酸モルヒネ注射薬、デュロテップパッチを使用した。徐々に傾眠傾向となり、呼吸状態が悪化し、入院44日目に亡くなった。

病気・病状の程度や進行に対するB氏の受け止めについては、入院時は、死を受け入れつつも、治療効果への期待がみられた。痛みを楽しむこともできていた。

動けなくなることや、疼痛のコントロールが行えなくなり、恐怖や絶望を抱くが、脳腫瘍増大の説明を機に、現状を受け止めて自分らしく生きるというように受け止め方に変化があった。具体的には、入院初日、“死ぬ準備は整えて入院した。何も思い残すことはない”、“放射線を始めたから痛みは良くなる”という発言があった。入院4日目、オキシコンチン内服していたが、レスキューは拒否された。“痛みを楽しんでいるというか、がんと闘っている気になる”という発言があった。入院9日目、右下肢の麻痺が進行していることを自覚し、“右足が動かなくなっている。来週に良くならなかったらマズイ”という発言があった。入院14日目、右足の麻痺がさらに進行していることを自覚する。疼痛増強し、オキシコンチンを増量する。“痛みが変わってきた。予想ができんことや。理屈もなにもなくていい。何でも飲む”、“寝たきりで生きるのは自分にとって意味のないこと”という発言があった。入院19日目、疼痛がさらに増強し、オキシコンチンに加え、塩酸モルヒネ、デュロテップパッチを使用する。入院36日目、脳腫瘍増大の説明を受け、“延命はしてほしくない。人間性がなくなる”と発言があった。看護師の援助のあり様については、常にB氏や妻に寄り添い、感情を表出できるようにかかわった。また、医師にB氏の想いを伝え、訪室してもらうようにかかわった。さらに、人生の振り返りを共に行った。

3. 死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理 (表2-1, 2-2)

死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理は、【思い描く理想の死への道を進みたい】、【この瞬間を自分らしく生きたい】、【復活への希望】、【今までの自分では生きられない恐怖】、【自己の歪みを認める】、【素直な感情を表出する】、【愛し愛されていることを感じる】、【わだかまりが融ける】、【命あるかぎり、自分の人生を生きる】であった。

テーマを【 】, サブテーマを「 】, 協力者の言動の要約を< >, 研究協力者の言動を“ ”とし、各心理について説明する。研究協力者の言動が分かりにくいところは、筆者が()で補足する。

1) 【思い描く理想の死への道を進みたい】

【思い描く理想の死への道を進みたい】とは、自分が思うように死んでいきたいという心理である。このテーマには、「動けなくなると死んでいくのは自分の最期ではない」、「労わられてもう静かに死にたい」がみられた。

- ①「動けなくなって死んでいくのは自分の最期ではない」は、＜動けなくなってあつという間に死にたくはない＞、＜寝たきりで意味なく生きるなら早く死んだ方がいい＞、＜死の直前に歩いてパッと死にたい＞というように動けなくなって死んでいきたくはないという心理である。

A氏 “父が13年の入院で動けなくなってから死ぬまでがとて早かった。動けなくなるのは嫌や。(泣いている)”

B氏 “寝たきりで生きるのは自分にとっては意味のないことや。それよりは、肝臓や腎臓が悪くなって破裂した方がいい。”

- ②「労われてもう静かに死にたい」は、＜お疲れ様と言われて、もう静かに死にたい＞というように現実的なことから離れて静かに死んでいきたいという心理である。

B氏 “娘が年金の手続きのことを言ってきた。もう静かに死なせて欲しい。今までお疲れ様くらい言ってもらいたい。”

2) 【この瞬間を自分らしく生きたい】

【この瞬間を自分らしく生きたい】とは、身体の状態はその時その時で変化するが、自分らしく生きたいという心理である。このテーマには、「自分でうまく身体をコントロールして生きたい」、「今、自分でできる事はして生きたい」、「自分で治療内容は決めて生きたい」、「癌の痛みを通して生きていることを楽しんでいる」という心理である。

- ①「自分でうまく身体をコントロールして生きたい」は、＜身体が楽になるように内服で調整したい＞、＜身体が楽になるように酸素吸入をしておきたい＞、＜身体の調子が悪くならないように創傷処置は止めておきたい＞、＜身体の調子が悪くならないように軟便剤は止めておきたい＞、＜身体の調子が悪くならないように内服しておきたい＞、＜眠るために必要な内服薬は自分が決めていける＞、＜身体の調子を保つために内服薬について試行錯誤する＞というように、自分で身体が楽になるように対処したり、身体の調子が悪くならないように対処し、試行錯誤しながら自分の身体を良好に保って生きたいという心理である。

A氏 “熱が上がったから薬もらえる？ 38℃越したらえらい”

- ②「今、自分でできる事はして生きたい」は、＜今できる事は自分で頑張りたい＞、＜手が腫れていても内服のことは自分でしたい＞、＜軟膏処置は自分でしたい＞というように、自分のことをするのに多少の困難はあるが、それでも今の自分でできることはして生きたいという心理である。

A氏 “手は腫れているけど、内服のことは自分でできる”

- ③「自分で治療内容は決めて生きたい」は、＜苦しくないのに麻薬は使いたくない＞、＜食べられないが点滴等の治療は要らない＞、＜胃管も酸素吸入も要らない＞というように、医療者が必要だと判断する医療行為であっても、今の自分の身体と対話し、自分が必要な治療内容を判断して生きたいという心理である。

A氏 “酸素を使い始めたばかりだし、息も苦しくないのに麻薬は使いたくない。まして今は便の調整に困っているのに、便秘になると言われたら絶対に使わん”

- ④「癌の痛みを通して生きていることを楽しんでいる」は、＜痛みを通して癌と闘っていたい＞、＜生きている実感があるから痛みを楽しんでいる＞というように、痛みによって生きている実感を持ちながら生きたいという心理である。

B氏 “痛みを楽しんでいるというか、癌と闘っているという気になる。痛みがあるから生きているという実感がもてる”

- 3) 【復活への希望】とは、治療効果を期待し、僅かな望みも心の支えにして、自分の生命力を信じて、もう一度良い状態になりたいという心理である。このテーマには、「治療効果を信じ期待したい」、「身体の変化に僅かでも望みをもってほしい」、「何回も復活できたのもう1回復活できるかもしれない」がみられた。

①「治療効果を信じ期待してほしい」は、＜放射線は必ず効くので期待したい＞、＜放射線の効果を

期待したい>、<放射線を開始したので効いてくると期待したい>、<放射線が効いたら食堂まで行けると期待したい>、<放射線が効いたらまた歩けると信じたい>、<調子は悪いが、もたらされるはずの放射線の効果に期待したい>というように、治療効果を期待し、治療効果によって今よりも良い状態になると信じたいという心理である。

A氏 “放射線が少しでも効いて息が楽になってくれたらええな”

B氏 “放射線が効いて痛みが減って食堂くらいまでには行けるようになるといいな”

②「身体の変化に僅かでも望みをもっていたい」は、<身体の変化に皮膚再生の望みをかけたい>というように、少しかもしれないが、身体の変化は良くなっている兆しであると信じたいという心理である。

A氏 “頭や首のまわりが痒くなってきた。新しい皮膚ができてきているんかな”

③「何回も復活できたのもう1回復活できるかもしれない」は、<思っていた以上に頑張ったので、もう1回復活できそうな気がする>というように、長い闘病生活の中で、何回も悪い状態から脱してこれたので、そんな自分の生命力を信じたいという心理である。

B氏 “去年の春にあと数か月と告知され、去年の〇月くらいと思っていたのがここまで生き延びている。会社も定年退職できたし、もうだめだと思っていたが今まで頑張れた。もう1回復活できそうな気がしているんです。十分してきたから、思い残すことはないけどな”

4)【今までの自分では生きられない恐怖】とは、治療効果が得られず、動けなくなっていくことや、今までの方法では身体をコントロールできない恐怖を感じながら、ついには動けなくなり、今までの自分では生きられないと絶望する心理である。このテーマには、「自分の力で動けなくなっていく恐怖を感じる」、「今までの方法では身体をコントロールできない恐怖を感じる」、「治療効果がないことに混乱する」、「動けない状況になってし

まったことを実感し絶望する」がみられた。

①「自分の力で動けなくなっていく恐怖を感じる」は、<思うように自分で動けず不安になる>、<確実に動かなくなっていく足を感じる>、<治療効果が得られず動けなくなる足が心配になる>というように、動けなくなっていく死でいきたくはないと願うが、動けなくなっていく自分を感じて、今まで思い描いてきた自分らしい死が迎えられなくなるかもしれないという恐怖を抱いている心理である。

A氏 “一人では不安なんや。思うように自分では動けない”

B氏 “足の麻痺が進んでいるように思う。寝たきりにはなりたくなかったけど薬が効かなかったし仕方ないな。このまま動けなくなるのが怖くて手で運動をしてるんや”

②「今までの方法では身体をコントロールできない恐怖を感じる」は、<突然の痛みが襲ってくることの怖さを感じる>、<経験したことのない強烈な痛みで支配されている恐怖を感じる>、<自分を見失うほどの痛みで狂乱する>、<排便コントロールが自分で難しくなった辛さを感じる>というように、疼痛や排便を今までは自分の方法でコントロールできていたが、それが困難になっていく自分を感じて恐怖を抱いている心理である。

A氏 “起きていても寝ていても両踵の痛みが時間に関係なくピリッとくるのが怖い。痛み止めを増やすと便秘が気になるし、この兼ね合いが難しい”

B氏 “こんな痛みは初めてや。ブルドーザーで背骨を破壊されている感じ。今までは背中全体が痛かったけど、今は背中的一点が集中して痛い。こんな痛みがいつまで、いつまで続くのか怖い”

③「治療効果がないことに混乱する」は、<治療効果がなく何が起きているのか混乱する>というように、期待するような治療効果が得られず、病状が進行し、自分の身体であって自分の身体ではない感覚となり、今まで自分と共にあった感覚が失われて、今までの自分を喪失する恐怖を抱いている心理である。

B氏 “足の感覚が変な。足は絡まっていないのにそう思ったり、頭が狂ってきているのかな。イレッサも効かなくて、放射線治療もしたけど。気休めとかは要らない。この件（治療が効いていないこと）については、先生に詰めて聞かないといけない”

④「動けない状況になってしまったことを実感し絶望する」は、＜動けなくなって人に迷惑をかけて生きていかななくてはならなくなり絶望する＞、＜動けない状態で生き続けることになり絶望する＞、＜麻痺で動けなくなり、生きる意味がなくなり絶望する＞というように、動けなくなったことで、自分らしく死ぬことも、この瞬間を自分らしく生きることもできなくなり、強い恐怖を抱えている心理である。

A氏 “もう終わりやな。自分では大丈夫と思っていたけどダメだった。皆さんの迷惑になるかもしれないけど用心してポータブルトイレを使います。動けなくなってしまうんやな。重病人やな”

B氏 “こんなに麻痺が進んでいると知らなかった。ああ、困った、困ったな。麻痺になるとは聞いていなかった。こんな状態になって情けない。みんなの迷惑にもなるし。先生も殺すわけにはいかんし自分も自殺することもできんし。これであとは痛みのコントロールをしていきましょうというところやな。こんな状態では生きている意味がない。もうご飯を食べる意味もなくなった。がん患者の最期ってこうになってしまうんやな。この状態になったら早く腎臓が肝臓がやられてくれた方がいい”

5)【自己の歪みを認める】とは、人生を振り返り、未解決となっていることに向かい受け入れていく心理である。このテーマには、「意地を張ってきた人生を振り返り、等身大の自分を受け入れる」、「長い間、心の痛みとなっていたことの原因を受け入れる」がみられた。

①「意地を張ってきた人生を振り返り、等身大の自分を受け入れる」は、＜意地を張ることを止め、等身大の自分で生きて行くことを受け入れる＞というように、意固地に生きていた自分を捨て、ありのままの自分になれば良いことに気づいていく心理である。

A氏 “今まで意地を張っていたけど、これが今の状態なんだと分かった。無理なことをしてもいいかん。急いでもできない。楽なようにできたらいいと思う”

②「長い間、心の痛みとなっていたことの原因を受け入れる」は、＜自分の蒔いた種で妻が苦勞してきたと思える＞、＜自分の性格が人間関係を悪くしてきたと思える＞というように、未解決となっていることの原因が自分にあると受け入れていく心理である。

A氏 “実家との問題も自分の蒔いた種でそのことで妻に苦勞をかけている”

B氏 “息子とはだいぶん前から絶縁関係にある。全然会っていない。私に何かがあっても知らせないように娘に言っている。私も頑固だったと思う。”

6)【素直な感情を表出する】とは、ありのままの自分で、感謝の気持ちを伝えたり、揺れ動きながらも本当の心を表出していく心理である。このテーマには、「感謝の気持ちを表出する」、「自分の心が求めていることを表出する」がみられた。

①「感謝の気持ちを表出する」は、＜妻に言い尽くせない感謝を伝える＞、＜息子に感謝を伝える＞、＜息子に感謝と嬉しさを伝える＞、＜初めて看護師に甘え、感謝を伝えることができる＞というように、今までは言えなかった人に自分の感謝の意を伝えていく心理である。

A氏 “(妻に) ありがと、すまん”

B氏 “(息子さんに) 会いたかったんで、ありがとう”

②「自分の心が求めていることを表出する」は、＜息子への気持ちを言葉で表現する＞、＜父親と息子に対する自分の素直な感情を言葉で表現する＞というように、看護師に対して本当は自分が何を求めているのかを表出していく心理である。

B氏 “会いたいけど、もう今さら会っても話すことはないし、お互い困ると思う(看護師に表出する)”

7)【愛し愛されていることを感じる】とは、自分は、愛し、愛されて生きていることを感じていく心理

である。このテーマには、「今まで受けてきた愛を感じ、自分のやり方で愛を表現する」、「避けていた相手を想っている自分を感じる」、「避けていた相手が自分を想っていることを感じる」、「亡くなった人からの励ましを嬉しく感じる」がみられた。

- ①「今まで受けてきた愛を感じ、自分のやり方で愛を表現する」は、＜妻の愛を感じ自分の死後も困らないように配慮する＞、＜見えないところで、そっと妻をいたわる＞、＜妻に苦勞をかけたくないので早く死ねたらいいと考える＞、＜自分が安心を得るよりも妻の身体をいたわる＞、＜娘や息子に自分ができる精一杯のことをしたいと感じる＞というように、動けない状態ではあるが、自分の愛情を今の自分でできる精一杯のやり方で注ぎたいという心理である。

A氏 “長く生きられないと思うと妻のことが心配や、妻にはよくしてもらった。今日いろんな人が面会に来てくれて僕がおらんようになって妻が困らんよう頼めて良かった。今日は嬉しかった”

B氏 “娘や息子に気をつけてやれない。今の自分で精一杯や（看護師に表出する）”

- ②「避けていた相手を想っている自分を感じる」は、＜戸惑いの中で、息子のことを想っている自分を感じる＞というように、看護師に質問されることによって、避けていた相手への自分の思いを感じていく心理である。

B氏（看護師が、本当は息子さんのことを想っているのではないかと尋ねると）少し戸惑って、うなづく

- ③「避けていた相手が自分を想っていることを感じる」は、＜会いに来てくれた息子の優しさを感じる＞というように、避けていた相手が自分のためにしてくれたことによって、自分を思ってくれていることを感じていく心理である。

B氏 “（面会に）来てくれたんやな”

- ④「亡くなった人からの励ましを嬉しく感じる」は、＜亡くなった人からの励ましを嬉しく感じる＞というように、夢で亡くなった人から励まされ、こ

の世にはもういないが自分を気遣ってくれていると感じる心理である。

A氏 “今日は良く眠れたし、とっても調子がいい。昨日亡くなった父の義兄が来てくれて、とても嬉しかった。僕の大好きな人で励ましてくれた”

- 8)【わだかまりが融ける】とは、人生の中で未解決となっていたことから解放され、穏やかで満ち溢れるような心理である。このテーマには、「自分で自分を苦しめていたものを解放し、心が満たされる」がみられた。

- ①「自分で自分を苦しめていたものを解放し、心が満たされる」は、＜妻とうまくやってこれなかった自分と向き合えて穏やかさに包まれる＞、＜息子と仲たがいしていた自分と向き合えて安堵感に包まれる＞というように、未解決となっていたことを通して、自分と向き合うことができ、穏やかな安堵感に包まれる心理である。

A氏の妻 “今までありがとうのあの字も言わなかった人が、昨日夜中に起こされて用事を言うんやけど最後にありがと、すまん、俺とおって幸せだったか？って言うたんにはびっくりしたで”

（その後、M氏は妻を怒鳴りつけることはなくなり、夫婦で昔にさかのぼり思い出話を毎日のようにした。A氏は最期まで穏やかな笑みを浮かべていた）

B氏 “（初めての面会時、息子に）会いたかったんで、ありがとう”

（その後、息子さんはためらいながらもベッドの上で動けないB氏に歩み寄り、互いに手を取り合った。そして泣きながら1時間2人の時間を過ごした。息子さんは帰りに看護師に一礼した。B氏は、良かった、ほんまに良かったと泣いていた）

- 9)【命あるかぎり、自分の人生を生きる】とは、生命力がその時その時で変わる中で、現実的に自分が決めたように死に向かい、自分らしく生きることを揺るぎないものにした心理である。このテーマには、「現状を理解した上で自分が決めたように死にたい」、「現状を受け入れ最期の時まで自分らしく生きたい」、「今ここでの生命力を信じる」がみられた。

①「現状を理解した上で自分が決めたように死にたい」は、＜現状を理解した上で、急変時の対応を自分で決めることができ良かった＞、＜必要以上の治療は要らない＞、＜人間性がなくなるので延命はしない＞というように、自分が決めたように死ぬために、積極的に働きかけていく心理である。

A氏 “何かをすれば治るといっているのであれば別だけど、

もう治らないといっているのであれば自分の体力の続くだけのことをしてもらったらそれ以上の治療は要らないと思っている”

B氏 “延命はして欲しくない。人間性がなくなる”

②「現状を受け入れ最期の時まで自分らしく生きたい」は、＜最期まで人間らしく生きたい＞、＜気持ちを穏やかにして過ごしたい＞、＜気持ちを落ち着けて過ごしたい＞、＜無理せず過ごしたい＞

表2-1 死の直前にわかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理

テーマ	サブテーマ	研究協力者の言動の要約	研究協力者の言動	研究協力者
思い描く理想の死への道を進みたい	動けなくなって死んでいくのは自分の最期ではない	動けなくなってあつという間に死にたくはない	父が13年の入院で動けなくなってから死ぬまでがとても早かった。動けなくなるのは嫌や。(泣いている)	A
		寝たきりで意味なく生きるなら早く死んだ方がいい	寝たきりで生きるのは自分にとっては意味のないことや、それよりは肝臓や腎臓が悪くなって破裂した方がいい	B
		死の直前に歩いてバツと逝きたい	ロウソクの火は最期にバツと燃えて消える。私も最期に歩かせてくれたらいいな	B
この瞬間を自分らしく生きたい	自分でうまく身体をコントロールして生きていたい	労われてもう静かに死にたい	娘が年金の手続きのことを言ってきた。もう静かに死なせて欲しい。今までお疲れ様くらい言ってもらいたい	B
		身体が楽になるように内服で調整したい	熱が上がったから薬もらえる？38℃越したらえらい	A
	身体が楽になるように酸素吸入をしておきたい	トイレに降りてしんどいので、酸素しときます。(しばらくして) しんどいのは良くなったから外しときます。それでしばらくは大丈夫やろ	A	
	身体の調子が悪くならないように創傷処置は止めておきたい	38℃熱が出た。今日は処置したくない	A	
	身体の調子が悪くならないように軟便剤は止めておきたい	今日はカマグ止めとく。下痢はしてないんやけど	A	
	身体の調子が悪くならないように内服しておきたい	寒気がして熱を測ったら38℃だった。薬飲んでおこうか	A	
	身体の調子が悪くならないように内服しておきたい	また、熱が上がってきた。今37.5℃。ロキソニン飲みます	A	
	眠るために必要な内服薬は自分が決めていける	寝る前の薬は効かないから要らない。熱があるのですぐに眠れる(ロキソニンを内服している)	A	
	身体の調子を保つために内服薬について試行錯誤する	昨日から5回便が出た。痔があるから便のたびにお尻が切れて血が出る。でも、ロベミンを飲むと便秘になるのが怖い。微妙な加減が難しいんです	A	
	身体の調子を保つために内服薬について試行錯誤する	薬を変えて、少し便を出すのに力を入れて良くなったように思う。続けて飲んでみようか	A	
	身体の調子を保つために排便について試行錯誤する	便が出にくくなった。今朝はガスが出ていたからトイレに座ってみたけど出なかった。冷たいリンゴジュースを飲んでみたがダメだった	A	
	今、自分でできる事はして生きたい	今できる事は自分で頑張りたい	できるうちは自分で頑張りたい	A
	自分で治療内容を決めて生きていたい	手が腫れていても内服のことは自分でしたい	手は腫れているけど、内服のことは自分でできる	A
	癌の痛みを通して生きていることを楽しんでいた	軟膏処置は自分でしたい	(ポストリザン軟膏の使用について) できなかつたら呼びます。遠慮はしていない	A
		苦しくないのに麻薬は使いたくない	酸素を使い始めたばかりだし、息も苦しくないのに麻薬は使いたくない。まして今は便の調整に困っているのに、便秘になると言われたら絶対に使わん	A
食べられない点滴等の治療は要らない		何か口にしたら下痢するな。点滴や他の治療はしなくていい	A	
復活への希望	胃管も酸素吸入も要らない	痛みを通して癌と闘っていた	(栄養状態が悪く胃管の説明を医師が行う) そんなもんは絶対に嫌や(酸素飽和度低下に対し酸素吸入を勧める) 要らない	A
		生きていく実感があるから痛みを楽しんでいた	痛み止めはあまり使いたくない。痛みがあると癌と闘っている気がする。痛みがないと病気は治っていないのに治った気になる。ポーンとするのも嫌です	B
	治療効果を信じ期待していた	放射線は必ず効くので期待したい	放射線は必ず効くので期待しているんです	B
		放射線の効果を期待したい	放射線が少しでも効いて息が楽になってくれたらええな	A
		放射線を開始したので効いてくると期待したい	すぐに放射線治療を始めたら良かった。これで痛みも楽になってくると思う	B
		放射線が効いたら食堂まで行けると期待したい	放射線が効いて痛みが減って食堂くらいまでには行けるようになるといいな	B
		放射線が効いたらまた歩けると信じた	治療の効果が出たら、また歩けるな。今は我慢の時や	B
		放射線が効いたらまた歩けると信じた	今日で放射線治療が最後。歩けるようになるかな	B
	身体の変化に僅かでも望みをもっていた	調子は悪いが、もたらされるはずの放射線の効果に期待したい	悪くなっていると思うけど、放射線治療の効果が出れば今よりはマンになると思っている	B
		身体の変化に皮膚再生の望みをかけた	頭や首のまわりが痒くなってきた。新しい皮膚ができてきているんかな	A
何回も復活できたのもう1回復活できるかもしれない	思っていた以上に頑張った。これの、もう1回復活できそうな気がする	昨年の春にあと数か月と告知され、昨年の〇月くらいに思っていたのがここまで生き延びている。会社も定年退職できたし、もうだめだと思っていたが今まで頑張れた。もう1回復活できそうな気がするんです。十分してきたから思い残すことはないけどな	B	

表2-2 死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理

テーマ	サブテーマ	研究協力者の言動の要約	研究協力者の言動	研究協力者
今までの自分では生きられない恐怖	自分の力で動けなくなっていく恐怖を感じる	思うように自分で動けず不安になる	一人では不安なんや、思うように自分では動けない	A
		確実に動かなくなっていく足を感じる	トイレに行くのに動いて感じたけど、右足が全く動かなかった。前よりも動かなくなっている	B
		治療効果が得られず動かなくなる足が心配になる	右足が動かなくなっているな、今までの経験から考えると、来週くらいに麻痺が良くならなければマズいな	B
		治療効果が得られず動かなくなる足が心配になる	足の麻痺が進んでいるように思う、寝たきりにはなりたくなかったけど薬が効かなかったし仕方ないな、このまま動けなくなるのが怖くて手で運動してるんや	B
	今までの方法では身体をコントロールできない恐怖を感じる	突然の痛みが襲ってくるこの怖さを感じる	起きていても寝ていても両踵の痛みが時間に関係なくピリッとくるのが怖い、痛み止めを増やすと便秘が気になるし、この兼ね合いが難しい	A
		経験したことの無い強烈な痛みに支配されている恐怖を感じる	こんな痛みは初めてや、プルドーザーで背骨を破壊されている感じ、今までは背中全体が痛かったけど、今は背中の一点が集中して痛い、こんな痛みがいつまで、いつまで続くのか怖い	B
		自分を見失うほどの痛みで狂乱する	昨日と全然違う痛みや、理屈もなにもなくていい、何でも飲むわ	B
	治療効果がないことに混乱する	排便コントロールが自分で難しくなった辛さを感じる	(便秘だから) 洗腸の方がいいのかな、看護師さんに任せます、自分ではどうすることもできないのが辛い	B
		治療効果がなく何が起きているのか混乱する	足の感覚が変な、足は絡まっていなのに、そう思ったり頭が狂ってきているのかな、イレッサも効かなくて、放射線治療もしたけど、気休めとかは要らない、この件(治療が効いていないこと)については、先生に話して聞かないといけない	B
		動けなくなっていく人に迷惑をかけて生きていかなければならなくなり絶望する	もう終わりやな、自分では大丈夫と思っていたけどダメだった、皆さんの迷惑になるかもしれないけど用心してポータブルトイレを使います、動けなくなってしまうんやな、重病人やな	A
動けない状況になってしまったことを実感し絶望する	動けない状態で生き続けることになり絶望する	この状態(動けない)ではあと1ヶ月とか言われた方が楽	B	
	麻痺で動けなくなり、生きる意味がなくなり絶望する	こんなに麻痺が進んでいると知らなかった、ああ、困った、困ったな、麻痺になるとは聞いていなかった、こんな状態になって情けない、みんなの迷惑にもなるし、先生も殺すわけにはいかんし自分も自殺することもできんし、これであとは痛みをコントロールをしていきたいと思いますというところやな、こんな状態では生きている意味がない、もうご飯を食べる意味もなくなった、がん患者の最期ってこうなってしまうんやな、この状態になったら早く腎臓が肝臓がやられてくれた方がいい	B	
自己の歪みを認める	意地を張ってきた人生を振り返り、等身大の自分を受け入れる	意地を張ることを止め、等身大の自分で生きて行くことを受け入れる	今まで意地を張っていたけど、これが今の状態なんだと分かった、無理なことをしてもいかん、怠いでもできない、楽なようにできたらいいと思う	A
	長い間、心の痛みとなっていたことの原因を受け入れる	自分の蒔いた種で妻が苦労してきたと思える 自分の性格が人間関係を悪くしてきたと思える	実家との問題も自分の蒔いた種でそのことで妻に苦労をかけている 息子とはだいぶ前から絶縁関係にある、全然会っていない、私に何かがあっても知らせないように娘に言ってる、私も頑固だったと思う	A B
素直な感情を表出する	感謝の気持ちを表出する	妻に言い尽くせない感謝を伝える	(妻に) ありがと、すまん	A
		息子に感謝を伝える	(息子さんに) 会いたかったんで、ありがと	B
	自分の心が求めていることを表出する	息子に感謝と嬉しさを伝える	(2回目の面会時、息子さんに) ありがと、嬉しい	B
		初めて看護師に甘え、感謝を伝えることができる	(便のことで) 初めて看護師さんに甘えた、ありがと、妻がいると、ついつい妻に甘えようたんや	A
愛する愛されることを感じる	今まで受けてきた愛を感し、自分の力で愛を表現する	息子への気持ちを言葉で表現する	会いたけど、もう今さら会っても話すことはないし、お互い困ると思う(看護師に表出する)	B
		父親と息子に対する自分の素直な感情を言葉で表現する	父親と息子は面会に来ないほうが自然なんや・・・会いたいよ(看護師に表出する)	B
		妻の愛を感じ自分の死後も困らないように配慮する	長く生きられないと思うと妻のことが心配や、妻にはよくしてもらった、今日いろんな人が面会に来てくれて僕がおらんようになって妻が困らんよう頼めて良かった、今日は嬉しかった	A
		見えないうちで、そっと妻をいたわる	尿の管が気になって起きて流すんや、嫁さんを起こすとあいつが今度眠れんようになるから、できるだけ自分でするんや	A
	避けていた相手を感じ、自分を想っていることを感じる	妻に苦労をかけたくないで早く死ねたらいいと考える	これ以上看病で妻に苦労はかけたくないで1日でも早く死ねたらと考えている	A
		自分が安心を得るよりも妻の身体をいたわる	妻が疲れているのでそろそろ帰りたいと思っているようだ、自分としては妻がそばにいてくれることは安心だけど	A
		娘や息子に自分ができる精一杯のことをしたいと感じる	娘や息子に気をつけてやれない、今の自分で精一杯や(看護師に表出する)	B
		戸惑いの中で、息子のことを想っている自分を感じる	(看護師が、本当は息子さんのことを想っているのではないかと尋ねると) 少し戸惑って、うなづく	B
亡くなった人からの励ましを感じ	会って来てくれた息子の優しさを感じる	(面会に) 来てくれたんやな	B	
	亡くなった人からの励ましを嬉しく感じる	今日は良く眠れたし、とっっても調子がいい、昨日亡くなった父の義兄が来てくれてとても嬉しかった、僕の大好きな人で励ましてくれた	A	
わだかまりが融ける	自分で自分を苦しめていたものを解放し、心が満たされる	妻とうまくやってこれなかった自分と向き合えて穏やかに包まれる	妻より「今までありがとあの字も言わなかった人が、昨日夜中に起こされて用事を言うんやけど最後にありがと、すまん、俺とおつて幸せだったか? って言うたんにはびっくりしたで」(その後、M氏は妻を怒りつけることはなくなり、夫婦で昔にさかのぼり思い出話を毎日するようにした、M氏は最期まで穏やかな笑顔を浮かべていた)	A
		息子と仲たがっていた自分と向き合えて安堵感に包まれる	(初めての面会時、息子に) 会いたかったんで、ありがと(その後、息子さんはためらいながらもベッドの上で動けないB氏に歩み寄り、互いに手を取り合った、そして、泣きながら1時間2人の時間を過ごした、息子さんは婦りに看護師に一礼した、B氏は、良かった、ほんまに良かったと泣いていた)	B
命あるかぎり、自分の人生を生きる	現状を理解した上で自分が決めたように死にたい	現状を理解した上で、急変時の対応を自分で決めることができて良かった	金曜日の病状説明で、自分の意思(急変時の対応)を先生に告げることができたのは良かった	A
		必要以上の治療は要らない	何かをすれば治るといっているのであれば別だけど、もう治らないといっているのであれば自分の体力の続くだけのことをしてもらったらそれ以上の治療は要らないと思っている	A
	現状を受け入れ最期の時まで自分らしく生きたい	人間性がなくなるので延命はしない	延命はして欲しくない、人間性がなくなる	B
		気持ちを穏やかにして過ごしたい	今は気持ちを穏やかに過ごすためにどうしようかと考えています	A
		気持ちを落ち着けて過ごしたい	覚悟はもうできているけど、気持ちを落ち着けるようにせんといかんと思ってな、それでお経を読もうと思って	A
今ここでこの生命力を信じる	無理せず過ごしたい	行きつく先が一緒だったら、無理はしたくない	A	
身体が飲み物を受けつけてくれているから大丈夫と信じる	身体が飲み物を受けつけてくれているから大丈夫と信じる	美味いわ、これだけ(紅茶を)飲めたら大丈夫です	A	

というように、自分らしく生きるために必要なことを具体的に探している心理である。

A氏 “覚悟はもうできているけど、気持ちを落ち着けるようにせんといかんと思ってな、それでお経を読もうと思って”

③「今ここでの生命力を信じる」は、＜身体が飲み物を受けつけてくれているから大丈夫と信じる＞というように、身体の状態はその時その時で変化しているが、今この瞬間の身体が飲み物を受けつけているため大丈夫と信じる心理である。

A氏 “美味しいわ、これだけ（紅茶を）飲めたら大

丈夫です”

4. 死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理過程 (表3-1, 3-2)

死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理過程は、【思い描く理想の死への道を進みたい】、【この瞬間を自分らしく生きたい】、【復活への希望】、【今までの自分では生きられない恐怖】がほぼ同時に存在していた。そして、【今までの自分では生きられない恐怖】が回避できなくなった時、【自己の歪みを認める】、【素直な感情を表出する】、【愛し愛されていることを感じる】ことができ、【わだかまりが融ける】という心理をたどっていた。そして、わだかまりが融けた後に、【命あるかぎり、自分の人生を生きる】ことを揺るぎないものにしていった。

表3-1 死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理過程 A氏

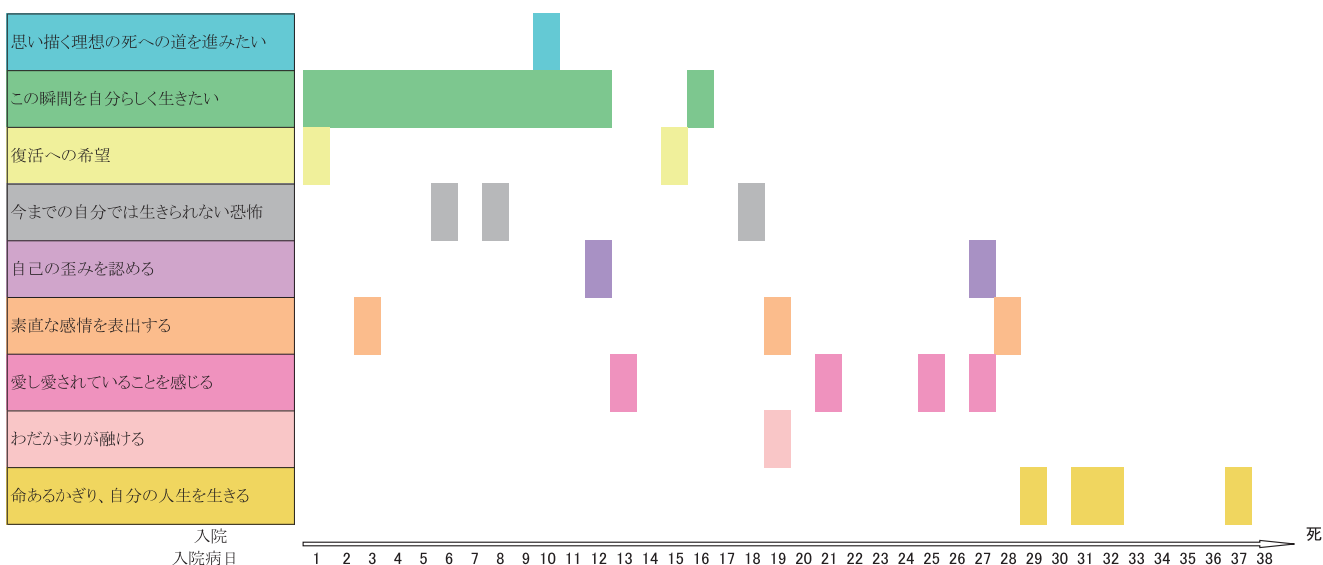
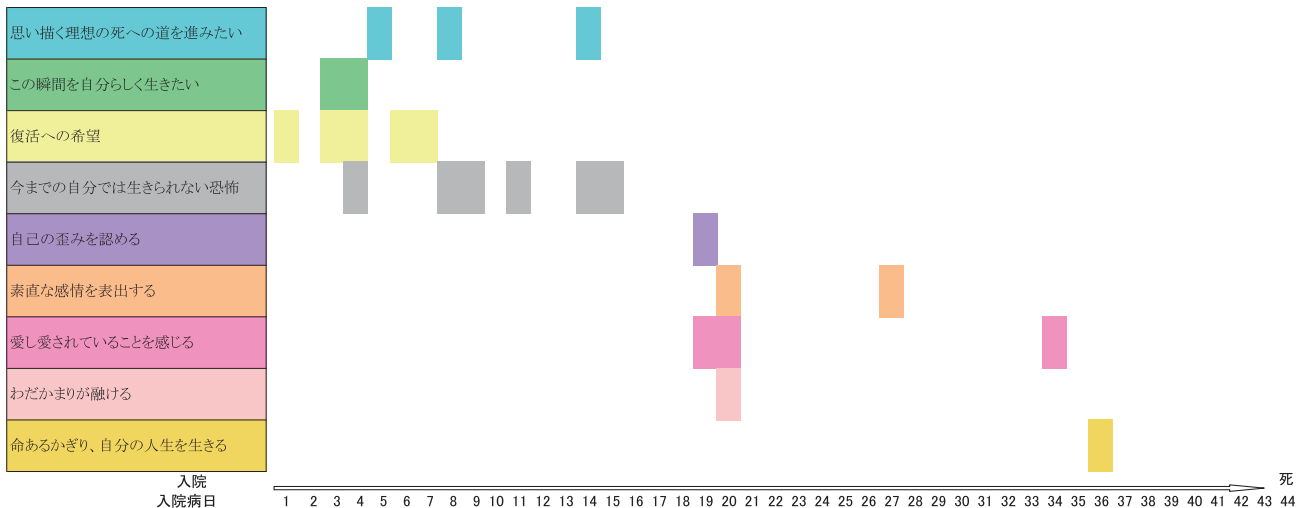


表3-2 死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理過程 B氏



考察

1. 恐怖が要となりわだかまりが融けたことについて
 わだかまりが融ける心理過程で、A氏、B氏は病状の進行により、意のままに死ぬことも生きることでもできなくなり、復活への希望も絶たれ、恐怖を抱いている。そして、今までの自分では生きられない恐怖を感じ、その後、自己の歪みを認める、愛し愛されていることを感じる、素直な感情を表出するといった心理の変化が生じている。身体と心は一体であり、死を直前に生の限界に直面している身体が、わだかまりを抱えて生きることに関界を迎えた心と重なって、心理の変化が生じたと考えられる。木村ら¹⁵⁾は、がんと戦いは、いわば内乱を侵す自分自身との戦いでもあるために、自己の問題と対峙する凶式と重なって、人は心の深みにあらためて対峙するのかもしれないと述べている。

そして、心身ともに自己の問題と対峙する時、今までの自分では生きられない恐怖が生じると考えられる。恐怖はネガティブな感情として取り扱われることがあるが、現存しない対象に立ち向おうとするあるいは遠ざかろうとする情動ともされており¹⁶⁾、変化を起こすことに重要な意味を持つと考えられる。恐れが現存しない対象に立ち向う方向で作用したことで、自己と向きあうことができ、自己の歪みを認める、愛し愛されていることを感じる、素直な感情を表出するといったことができるようになったと考える。

2. わだかまりが融けるということについて

A氏、B氏は、強い恐怖の後に、自己の歪みを認める、素直な感情を表出する、愛し愛されていることを感じるができている。自己の歪みを認めることについては、意地を張ってきた人生を振り返り、等身大の自分を受け入れたり、長い間、心の痛みとなっていたことの原因を受け入れることをしている。このことから、強い恐怖の中で自分がどのような人間であり、どのような在り様で生きてきたのかを知ることを学んだのではないかと考える。また、素直な感情を表出することについては、今まで向き合えなかった人や看護師に対して感謝の気持ちを表出したり、看護師に自分の心が求めていることを表出することをしている。このことから、人に感謝して素直に生きることを学んだのではないかと考える。また、愛し愛されていることを感じることは、今まで受けてきた愛を感じ、自分のやり方で愛を表現できている。また、避けていた相手を想っている自分を感じたり、避けていた相手

が自分を想っていることを感じるができている。さらには、亡くなった人からの励ましを嬉しく感じることもできている。これらのことから、自分は周囲を愛して生きており、周囲から愛されて生きている存在であることを学んだのではないかと考える。

わだかまりが融けるということは、氷のように固く冷たかった心が、今までの自分では生きられない恐怖の中で、自分の歪みに気づき、素直になり、愛し愛されていることを感じることで融解し、水になり、どこまでも自由に自分らしく流れていくような感覚のようなものである。未解決なことを作り、向き合えずに生きてきた自分の在り様を知ることで、人に感謝して素直に生きることや、自分は愛し愛されて生きている存在であるということのすばらしさを学び満たされることであると考える。

田中⁷⁾は、再発・転移後のがん患者は、危機的状況による苦悩の中で、今までの生き方を振り返ることで人生の再評価をしたり、周囲に感謝でき、心から生きていることが素晴らしいと思えるようになるといった自己成長がみられることを明らかにしている。これらのことから、本研究の患者は、今までの自分では生きられない恐怖という苦悩の中で、自己成長することによって、わだかまりが融けたと考える。

3. わだかまりが融けた後の心理について

わだかまりが融ける前に、A氏、B氏に共通して、今まで向き合えなかった人に対して素直な感情を表出したり、愛し愛されていることを感じる心理がみられた。そして、わだかまりが融けた後も続いていた。このことに加えて、A氏は、看護師に初めて甘え感謝の気持ちを伝えることができたり、亡くなった人からの励ましを嬉しく感じるができている。このことから、わだかまりが融けた後は、今まで向き合えなかった人だけでなく、看護師や亡くなった人といった自分の近くにいる人に対しても素直になれたり、愛し愛されていることを感じられるようになっていた。これは、未解決なことを作り、向き合えずに生きてきた自分の在り様を打ち破ったことで、自分の近くにいる人に対しても自由で開かれた自分で生きていけるようになったためと考える。

また、わだかまりが融けた後には、自分が決めたように死ぬために、周囲に積極的に働きかけていくことや、自分らしく生きるために必要なことを具体的に探していた。そして、身体の状態はその時その時で変化しているが、今この瞬間の生命力を信じ、自分らしく生きることを揺るぎないものにしていく。このように

自分らしく生きることができるようになったのは、病の体験を通して、自分の在り様を知り、人生の学びを深めたことで、自分に残された人生をどのように生きるか明確にできたのだと考える。

研究の限界と今後の課題

本研究の結果は、主に看護記録からのデータであり、研究協力者が2名と少ないため、死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の全ての心理過程ではなく一部であると考えられる。そのため、今後は、データ収集の方法を検討し、症例を増やし、分析を重ねることが課題である。

結論

1. 死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者の心理過程は、【思い描く理想の死への道を進みたい】、【この瞬間を自分らしく生きたい】、【復活への希望】、【今までの自分では生きられない恐怖】がほぼ同時に存在していた。そして、【今までの自分では生きられない恐怖】が回避できなくなった時、【自己の歪みを認める】、【素直な感情を表出する】、【愛し愛されていることを感じる】ことができ、【わだかまりが融ける】という心理をたどっていた。そして、わだかまりが融けた後に、【命あるかぎり、自分の人生を生きる】ことを揺るぎないものにしていった。
2. 死の直前にわだかまりが融けた悪性腫瘍患者は、「今までの自分では生きられない恐怖」が要となり、わだかまりが融ける体験ができていた。
3. 病の体験を通して、人生の学びを深め、自分の人生を生きることを揺るぎないものにできていた。

本研究は、第22回日本看護研究学会中国・四国地方会学術集会で発表した原稿を加筆修正したものである。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、ご協力と励ましをくださいましたA氏、B氏のご冥福をお祈り致しますとともに、A氏、B氏のご家族に深謝致します。また、研究を快く承諾し、ご協力くださいました病院関係者の皆様、研究のご指導をくださいました皆様に心より感謝致します。

文献

- 1) 大津秀一：死ぬときに後悔すること 25, 致知出版社, 2009.
- 2) Bronnie Ware：仁木めぐみ翻訳, 死ぬ瞬間の5つの後悔, 新潮社, 2012.
- 3) 沼野尚美：癒されて旅立ちたい, 1, 俊成出版社, 2003.
- 4) 若林理恵子, 澤田愛子：臨死患者のことば－意味の分析と支援のあり方をめぐって－, 富山医科大学看護学会誌, 5 (2), 41-54, 2004.
- 5) 川崎雅子, 金子久美子, 福岡幸子, 他：終末期患者から学んだスピリチュアルペインとケア－患者との会話場面を通して－, 県立がんセンター新潟病院医誌, 44 (1), 27-31, 2005.
- 6) 安藤満代：がん患者の回想法におけるテーマとプログラムの検討, がん看護, 10 (6), 535-540, 2005.
- 7) 田中いずみ：再発・転移後のがん患者が見いだす希望とその希望を見いだすための要因, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 8 (1), 39-47, 2012.
- 8) 下舞紀美代, 山口哲朗, 小田正枝：がん患者の病名告知から終焉までの心理的変化とその要因, 日本がん看護学会誌, 25 (3), 30-38, 2011.
- 9) 小山千加代, 河正子, 笠原嘉子：がん末期患者の病状進行と心理の移り変わり 緩和ケア病棟における看護記録の分析から, 臨床死生学, 5 (2), 85-91, 2000.
- 10) Phillip, S., Judith, S., Donald, K. et al. : Emotion knowledge : further exploration of a prototype approach, Journal of Personality and Social Psychology, 52(6), 1061-1086, 1987.
- 11) 菅原よしえ, 齋田トキ子, 西條泰子, 他：がん告知後の患者における病状の理解と感情状態に関する調査, 日本赤十字看護学会誌, 3 (1), 108-115, 2003.
- 12) 濱田由香, 佐藤禮子：終末期がん患者の希望に関する研究, 日本がん看護学会誌, 16 (2), 15-25, 2002.
- 13) 關戸啓子, 内海滉：がん患者の心理－手記を分析して－, 川崎医療福祉学会誌, 7 (1), 103-112, 1997.
- 14) Elisabeth Kübler-Ross : On Death and Dying, 1969, 鈴木昌訳, 死ぬ瞬間－死とその過程につ

いて, 中央公論新社, 2011.

- 15) 木村哲也, 石原美智恵, 南美奈子: 終末期患者への精神療法的接近について, 心療内科, 10 (6), 413-417, 2006.
- 16) 濱治世, 鈴木直人, 濱保久: 感情心理学への招待 - 感情・情緒へのアプローチ -, 55, サイエンス社, 2005.